

---

# 「時効不成立」 10

長根兆半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「時効不成立」 10

### 【Nコード】

N3000F

### 【作者名】

長根兆半

### 【あらすじ】

ハンガリーが二〇〇四年に、EU加盟を果たすと同時に開店したブダペストの「セーフ寿司」は、板前店長の菊田正春が頑張っていた。それから三年が過ぎた二〇〇七年の八月、狭間良孝は日本を出て十七年振りに初めて、ホリデーらしいサマーホリデーを四十五日間取った。この時、思いもかけない出会いが待っていた。

## 第9章 出会いの中で

「時効不成立」 10

### 第9章 出会いの中で

ハンガリーが二〇〇四年に、EU加盟を果たすと同時に開店したブダペストの「セーブ寿司」は、板前店長の菊田正春が頑張っていた。それから三年が過ぎた二〇〇七年の八月、狭間良孝は日本を出て十七年振りに初めて、ホリデーらしいサマーホリデーを四十五日間取った。

「飽きるほど飛行機にりましたが、観光らしい事がなかったので、二か月ばかりヨーロッパを観光したい」と狭間が朱美に言うと、一か月にして欲しい、と言われ、それじゃ四十五日、という事で落ち着いた。

「仕方ないわね、頑張ってくれている事でもあるし、それに、還暦でしょ、今年」と参碁朱美は言つて、そのお祝いも兼ねて、八月一日から九月十四日までにした。

この時期はヨーロッパに、観光客は押し寄せるが、日本レストランは比較的暇な時期だった。

日本へも帰るのか、と参碁朱美に聞かれたが、分からないとだけ、狭間良孝は言った。

臀部の張った短足安定型の狭間良孝は、車でヨーロッパを回ってみたい。と言う衝動にかられ、中古のメルセデス・ベンツを買った。その日の夕方になって、シミジミと車を撫でていると、携帯電話がなったので、狭間は、朱美かと思い覗くと、違っていた。

「もしもし、クシィーバです。私、行きたいけど、いいかしら」と言うものだった。

クシィーバは、菊田から話を聞いたと言う。

ホリデーに入る前、菊田と飲んで、ほんの冗談のつもりで、誰か相棒がいると楽しいけどなあ、と狭間が言った事を菊田が店で言ったらしかった。

仕事はどうするんだと聞くと、楽しくないから止めると言うことにした、と言う。

何処でも、時給社員の出入りは激しく、狭間も、驚くには値しなかったが、後ろめたさを感じた。

二人で旅行しようとしたが、クシイーバの身元がハンガリーではなく、ロシアからの亡命滞在だった事から、国外に出る事が出来ない事が解った。

二人は急速な接近に、ためらう事もなく、国内旅行を楽しむことにした。

八月の建国記念花火大会がドナウ川で例年のように行われ、もうすぐ狭間の、ホリデーも終わろうとしていた。

この時、狭間は、自分の年齢、老後と言う事を視野に入れてみた。そして、自分が戻る巢のないことに、いまさらながら顔が曇った。予算に問題はないが、言葉ができない事で、家を購入するにも、困難な事が解ると、クシイーバに相談してみた。

すると、彼女は住所不定だと語りだし、金はあるから、共同で家を買わないかと、言い出した。

小さいながらも購入し、イザ生活してみると、クシイーバは、これからは私が働くから、狭間はもっと好きなことをやれ、と言い出した。

九月にはいると、狭間は朱美に電話を入れた。

各国にある店には、日本人が居る、経営に対する信頼感も築け、狭間は、自分がいなくとも充分やっていけると思った。

そのことを朱美に言くと、以外にあっさりとわかってくれるのだった。

狭間良孝は参碁朱美が、ハンガリーに来ると、今後の事を話し合い、昔の知人と道で会い、お茶を飲み、分かれる、そんな感じを狭間は

持った。

クリスマスが終わり、新年になると、参碁朱美から、五千ポンドの振込みが来た。

退職金とも、お祝いとも、とにかく肝とだと言った。

外は、頭の真に錐を刺さされる様な極寒に、見事な樹氷が視界を飾った。

狭間は、これからの夢を描いてみたが、心のどこかには、黒い錘を感じないわけにはいかなかった。

日本と同じ極寒の二月、庭木さえも樹氷になるのだった。

リヨウとクシーバはそれに見とれ、もうすぐ春だね、と言いつつ合った。

やがてスモモやアンズ、桃や桜の固い蕾が見える頃、それは、ブダペストのブダ側に新しく出来た日本レストラン「琵琶湖」での事だった。

「ねエ、リヨウ、どうしてリヨウなの？」とクシーバが、狭間に聞いた。

彼は、今更のような気がしたが、聞かれてみると、その訳を話した事がなかった事に気が付いた。

ハンガリーがEUに加盟し、シェンゲン協定に加盟し、いよいよヨーロッパの仲間入りを具体的に果たし、クシーバと狭間は、国境がなくなったのだから、旅に出ようか、と言う話は出たが、遂に流れていた。

人も、物量も大きな動きを見せ、新しいレストランも増えていた。クシーバと狭間は、珍しく最近新しく出来た「琵琶湖」レストランに入っていた。

二人は寿司カウンターの近くの、テーブルに着いた。

長い大きなカウンターの中には、日本人ではない東洋人の顔をした板前が二人、退屈そうに仕事をしていた。

昼過ぎというせいもあるのだが、ガランとしたカウンターに、紺の

背広をきちんと着こなした日本人らしい客が一人だけ居た。二人は、窓際という事もあって、その客の丁度後ろのテーブルだった。

参碁朱美の五軒目の「セープ寿司」が出来る前まで、ハンガリーに四軒あった寿司の店の全てが、経営者は日本人で、日本風な作りの店だったが、今では十一軒になっていた。

店の作りもかなりバラエティに富んできていた。

何より、経営者の国籍がその文化を反映している事だった。

そして、東京、大阪、富士、桜と日本名を上げた看板の店内は、韓国、中国、ハンガリー色だった。

これは何もハンガリーに限った事ではなく、イギリス、フランス、イタリアそしてオーストリアに行っても、何処の国の日本レストランも同じようなものだった。

俳画の紫陽花が、経営者の感覚なのか、逆に掛かっている事も珍しくはなかった。

洋風の店内のここくに、日本人形や扇子、達磨のおもちゃ、花札さいころなどを、置けばいいというように、やたらと、しかも雑然と置いている店もある。

日の丸や写楽のコピーを壁に張り、仏像を置き、パイプ椅子の店さえあった。

ポリシーが有るのか無いのか、国際的なのか、視覚には雑然さだけが飛び込んでくる。

日本人の高度な製作能力や優秀な技術の高さを、彼らは猿真似と言って笑うが、彼らのやり方は、猿真似以下で、中身が空っぽ盗み取りだ。と、狭間良孝はいつも思っている。

今も、この店内を見渡し、そう思った。

立派な黒松の鉢植えだなど思っただけで近くと見ると、それは模造品だった。

「良孝の良、リョウって読むんだ」と狭間はクシィーバに向き

直っていった。

「ずいぶんややこしいの、フーン」と、クシーバは頷いた。

この話に、カウンターの客が感電したように頭をピクンと上げた。

「トイレ、どこですか？」とカウンターの客は、目の前の板前に声を掛け、教えられた方向を見ると、カウンター席から降りた。

この時客は、狭間と視線が合ったが、まったくの一瞬という事もあるのか、何の感情も、互いに受けなかった。

狭間は、単に、矢張り日本人だった、としか思わなかった。

狭間とクシーバは言葉について話をしていた。

「知らないほうが幸せな事だって、一杯有るよ」と狭間が言った。

「言える、聞かなきゃよかった事がある」とクシーバは言って、少し俯いた。

「どんな事？」

「リヨウの年齢」

「そうだね、三十五も違うんだから、気にするのが当たり前だね」と狭間が言った時、斜め後ろに視線を感じた。

狭間は、座り直す振りをして、その先を目の端に捕らえた。

さっきトイレに立ったカウンターの客が、立ち止まってハンカチーフを使っていたようだったが、狭間が動くと同時に、歩き出したようだった。

客は、そのままカウンターに戻り、何か注文したようだった。

「絶対に長生きしてよ」とクシーバが無邪気に言った。

「いつかも言ったけど、それだけは分からない、死ぬのは、歳に係なく必ずあるんだしね」と狭間は言いながら、カウンターの客の背を眺めた。

後ろに目が有るのか、と言う事を、勘のいい人に言う事があるが、狭間良孝はその客の背に、耳があるような気がした。

客は、何かを食べる為に手を動かしているのだが、椅子に背凭れるとか、腰の位置や座り具合を直すとか、あってもよさそうなものだが、それもなく、まったく背は動かなかった。

「俺にかまわず、いい人が居たら、そっちへ行っても良いよ。クシ  
イーバの幸せは、俺の幸せなんだからね」

「そんな事言つて、病気になったらどうする？」

「その時は救急車で行くさ。その時は知らせるから、ね」

「いやだよ、そんな事言つて、私を嫌いになったのか」とクシイー  
バは、涙ぐんだ。

「大丈夫だよクシイーバ。誰かと幸せに暮らす事が出来るようにな  
れば、クシイーバがまったく知らない内にそうなるから」と狭間は  
言つて、ふと一人遊びの昔が浮かび、この子がそうなるのは、無理  
かもしれない。厭世的かな。ふとそう思った。

「私は寂しいけど、リヨウは寂しくないのか？」

「寂しくない人間なんて、居ないさ」

「リヨウはそれで良いかもしれないけど、私はどうするの」

「だから、もしいい人を見つけたら、好きにして良いっていうんだ  
よ」

「そんな事言わないって約束して、私、最後までリヨウの傍に居る」  
「いや、こんな良い人に巡り会えたって、言つてきて欲しい。そう  
すると、俺、安心だからね」と狭間が言っている間も、カウンター  
の客は、ピクリとも動かなかった。

「なんだろう、誰だろう、どうしたんだろう俺。と狭間は気になった。  
「リヨウ、帰ろうよ」とクシイーバが言った。

「ん、でももう少し居ようよ。後で、店の人に聞きたい事があるか  
ら」と狭間は、クシイーバへというより、カウンターの客にでも言  
うように言つた。

狭間は、飲み物の追加を頼もうと、店のものを呼んだ。

「彼はいつも来る人ですか？」と英語で狭間は、カウンターの客に  
目配せして言つた。

「ここ四・五日前から、昼と夜、毎日来ます」

「仕事のようですか？」

「いえ、観光という事でした」



「そう、ありがとう、あ、ジュース二つ、お願いします」

狭間は、「彼はいつも来る人ですか？」だけ、客に聞こえよがしに言った。

狭間とクシーバはジュースを飲み終わると、店を出た。

メルセデスに乗ってから、もう一度、狭間は店を振り返った。

冬時間の外は暗くなりかけ、気が付かなかったが、やけに店の中が明るく見えた。

「どうしたのリオウ、なんか変だよ」とクシーバは言っ店を振り返った。

その時、クシーバの携帯が鳴った。

いつもの事だった。

「リオウ、後一時間で、事務所へ行く」

「ああ」

狭間良孝にとつて、都合がよかった。

どうせクシーバは、行けば最低でも四時間は戻ってこない。

「送って行くよ」と言っ狭間が時計を見ると、既に四時に近かった。

あの客に会ってみたい。誰だろう。昼夜と来るらしいが、今日の夜も来るだろうか。

既にこの時間だが。

いや、会すべき人なら、必ず来る、狭間はそう思った。

クシーバを送り届け、「琵琶湖」に引き返えそうと思い、六時に行った。

「琵琶湖」の明るい店内を外から見ると、中には、数組の客が居た。カウンター席に客は居なく、板前がぼんやり柱を背に立っている。

狭間は矢張り来ないかなと思ったが、待つてみることにした。

店に入ると、まっすぐにカウンター席に行った。

たどたどしい日本語で、ウェイトレスがメニューを持ってきたが、これといった食欲もなく、ミネラルウォーターを頼んだ。

その水が来る前に、あの客は、狭間を追う様に間もなく入って来た。

入り口に客の気配を感じ、狭間がカウンターから視線をやった。入り口に立った客と一瞬目が合い、そのまま動けなくなった。

その客も同じだった。

客と狭間良孝の視線は、引き合うように縮まり、客は狭間の横に立った。

どこか緊張感が漂う二人の様子に、目の前の板前までが、啞然として声を掛けそこなっていた。

「山ノ神」と客は、小さく言った。

その声に、狭間は、ガタリと椅子から跳ね下りた。

自分をそう呼ぶのは、この世で鈴城広州しかない。

「コンペ・・・？」と狭間が言うのがやっとで、後は声にならなかった。

驚き過ぎると、表情がなくなると言うが、今の狭間がそれであった。コンペとは、狭間良孝が鈴城広州を、昔そう呼んでいた名前だった。そこに水が運ばれて来たが、鈴城広州は少し歩かないか、と狭間良孝を外に誘った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3000f/>

---

「時効不成立」 10

2010年10月11日15時05分発行